

# 戦争の思い出

黒羽清子

南台四丁目

昭和二〇年五月二十五日夕より二六日未明にかけて、空襲警報発令。無気味な音をたててB 29の爆音が聞えてきて東の空に照明弾が落され、ぱつと明るくなったと思う間もなく焼夷弾がぱらぱらとすごい音と共に落ちてきて、あちこちで火の手があたり、道路は風がおこり火が這っている。逃げ場を失った我が家族は裏に貯水槽があったので、皆でそこに漬かる。甲州街道の方から両親をリヤカーに乗せてきた娘さんが、火の中を逃げてきて貯水槽に飛び込む。何人か次々に入ってきて、お題目をとなえている。あとで聞いた事だが、東大付属のプールに逃げた人達は、荷物に火が移り水がお湯になって焼け死んだそうだ。お気の毒。

家では小さい弟のために、父が物置から自転車を持ち出し、水の中に沈め、その上に座敷から布団を取ってきて弟を座らせ、皆でそれにつかまって胸まで水に漬かって、我が家の燃えるのを手のほどこしようもなく眺めていた。祖母が病で寝ていて動けず焼死した。亡くなったと思われる時刻、一羽のス

ズメが母の肩に乗ったのが祖母の魂がきたのだと母は泣いていた。白々と夜が明け、B 29も退散し、静かになった明け方、焼け跡の中からシューシュー音がする。なんだろうと家の方をみると、前の晩に仕掛けておいた圧力釜が柱の燃えた残り火で御飯が炊けていた。ありがたや、さっそく食事にありつけた。おかずもなにもない御飯だけでも飢えをしのげる。ぜいたくは言っていない。あたりを見わたすと、焼野原の中にぼうと浮かんでいる物体がある。それは家の裏のお稲荷さんで、焼けず祠が立っていた。御神木の松の枝先は焼けていたが、木はそのまま祠と共に残っていた。霊験あらたかなんだなとつくづく感心した。さっそく今晚から雨露しのぐ所もないので、失礼して祠の下に家族五人ほんの畳一枚位の所で暮らす。バラック小屋が出来るまでの一時しのぎ。父と二人で、甲州街道の強制疎開で焼けなかった所から、柱等をリヤカーで取りにいて、バラック小屋を建てる。食糧難なので焼け跡をかたづけ、じゃが芋、さつま芋、とうもろこし等を植えたりして自給自足の生活。あ

る日じゃが芋をゆでお茶碗につぶして食べていたら、通りがかりのおばあさんがいきなり「白い飯食べているなんて、おいらにもくれ」「おばあさんよく見て。これは御飯ではなくじゃが芋よ」。のぞいてやっと納得。こんなエピソードもあった。やがて麦が出来、粃もみを洗濯板でもんでとる。手が痛くなるのを我慢してもみつつける。泣きながらやっていた。それを粉にしてもらって、ふすま（小麦粉にひいた時に出る皮のくず）も食べた。空腹を充たすには仕方がない。

やがて終戦。だが食糧難は続く。主食の配給は不足し、お米のかわりにさつま芋の配給。これが常食となった。あれから四十数年たった今、ひもじい思いをした事もだんだんうすれてきた。平和な時代、もう戦争は沢山だ。二度とくりかえしたくない。

